

NEWSLETTER

令和大蔵経と次世代人文学

本研究は、研究媒体のデジタル化（DX）と人工知能（AI）が共同して急速に創成しつつあるあらたな研究環境の整備において、日本の人文学が対応すべき要件を摘示するとともに、それらを実現するデジタル学術空間のモデルを構築し、人文学の伝統的営為を発展的に再編するための具体的道筋をしめす――

中。無色。無生。
法空相。不生。
空即。是。
羅蜜。目。
南當。衣。
聲香味觸法。

2026.7
Collaborative
Research Data
Infrastructure
for the Humanities

第6号

公式サイト



<https://reiwadzk.dhii.asia/>

<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/deed.ja>

1 新たな風景空間の発見に向けて

●根本裕史 [広島大学]

1999年8月8日、ネパールのカトマンドゥに到着した。初めての海外一人旅。何もかもが新鮮だった。整備されているとはいえない道路、ゴミ捨て場の異臭、狭い道を行き交う車やリクシャー（三輪タクシー）、道端にごろ寝する野良犬、騒音。翌日はダルバール広場からスワヤンブナートへ。圧倒的な空間。初めて見るヒンドゥー教やネパール仏教の文化であった。そこには驚きがあり、高揚感が生まれた。そこで自分が見たものは、まぎれもなくエルヴィン・シュトラウスがいうところの風景空間であった。

シュトラウスは、座標軸で客観的に把握される「地理空間」と、初めて訪れる街の感覚的刺激と共に主観的に体験される「風景空間」を区別している。アンリ・マルティネはその理論を発展させ、リズムの美学というものを論じている。空間芸術である絵画の中にもリズムがあり、それが風景空間の中で感じ取られる時、美的経験が生まれるのだという。初期瑜伽行派の依他起性、ダルマキールティ（法称）の直接知覚、西田幾多郎の純粹経験など、色々なことを連想する。

2026年7月の今。大蔵経のテキストをTEIで紐付けることも、IIIFで經典の写本・版本を有機的につなげることも、生成AIによる文献解析も、最終的にはこうした美的経験や、風景の発見というところに結実するものでなければならない。1999年頃の私たちは、Nisus Writer（1989年登場したMacintosh向けワープロソフト）で文章を作り、印刷した資料に赤線を引き、NotebookLMもClaudeも使わず、代わりにNetscape Navigator（ウェブブラウザ）でhtmlをゆっ

くり読み込んでいた。あの時代に見出し得なかった風景空間が、今どのようにしたら姿を現すのであろうか。

これから必要となるのは、生成AIより正確に文献を読解する力だけでない。むしろ、デザイン力やアートの思考といったものが必須となる。テキスト上の風景空間とは、しばしば、ある知と別の知との間に重要なつながりが発見された時などに見られるものである。その発見には芸術的ともいえる独自の空間認識や、配置能力が必要である。それまでつながりがあるとは思われていなかった二つの知を、アートの思考によって結びつけること。そのためには、当然ながら広い視野も必要となる。そして、未知の物を受け入れる柔軟性も。精神文化の豊かな形成の歴史を、「中心と周縁」あるいは「オリジナルとその派生形態」といった二項対立で見えてしまう限り、私たちは重要な何かを見落とすであろう。

広島大学では2026年4月にアジア思想文化プロジェクト研究センターを設置した。仏教およびサンスクリット文化を主軸として展開した南アジア（インド、スリランカ）・内陸アジア（チベット）・東アジア（中国、朝鮮半島、日本）の思想と文化を多角的・双方向的に検討することにより、東洋的思考の根源あるいはその多様な広がりを見出すことを目的としている。むしろ「広くではなく、深く」（non multa, sed multum）あらねばならない。私たちが真の創造性を発揮し、新たな風景空間を見つけるために。

大本山増上寺三大蔵がもたらす未来

——大本山増上寺三大蔵 ユネスコ「世界の記憶」国際登録記念シンポジウム開催報告

● 朴賢珍 [一般財団法人 人文情報学研究所]

■ はじめに

本シンポジウムは、2026年5月31日、大本山増上寺光摂殿において、浄土宗・大本山増上寺・一般財団法人 人文情報学研究所の主催により開催された。2025年4月17日に大本山増上寺所蔵の三種の大蔵経がユネスコ「世界の記憶」に国際登録されてから1周年を迎えたことを記念するものである。本特別推進研究の研究代表者である下田正弘が第一講演に登壇し、研究分担者である永崎研宣が対談に加わった。

増上寺三大蔵の概要とユネスコ「世界の記憶」への国際登録に至る経緯については、本ニューズレター第3号(2025年12月発行)においてすでに紹介している。本稿では、三大蔵そのものの説明は最小限にとどめ、当日の講演および対談の内容を中心に報告したい。

司会を務めた柴田泰山氏(浄土宗総合研究所研究員)が、今回のシンポジウムは、申請書制作から提出に至る過程で協力した研究者を迎え、三大蔵の意義と未来を考える場であると述べた。

■ 開会挨拶 — 小林正道氏(大本山増上寺執事長)

小林正道執事長からは、徳川家康公によって三種の大蔵経が増上寺に集められたこと、戦乱や王朝交替のなかで大陸では多くの大蔵経が散逸・焼失したのに対し、増上寺ではそれらがきわめて完全に近い形で伝えられてきたことが紹介された。また、柴田氏を中心に進められてきたデジタル化の現状にも触れ、三大蔵のもつ学術的・思想的・宗教的価値を、今後さらに広く共有していくことへの期待が示された。

■ 第一講演「DX-AI時代の文化財と大蔵経の編纂」

—— 下田正弘(武蔵野大学教授/東京大学名誉教授)



第一講演では、下田正弘が、仏教がインドから東南アジア、チベット、中国、日本へと伝わり、サンスクリット語・パーリ語・漢語・チベット語など複数の言語世界を横断して継承されてきたことを踏まえ、漢訳大蔵経の特殊性を論じた。儒教や道教という成熟した思想体系をもつ中国において、外来宗教である仏教が長期にわたり翻訳され、受容され、中国語の世界にも大きな変化をもたらしたことは、世界史的にみてもきわめて稀有な出来事であると指摘した。そのうえで、漢訳大蔵経とは、その長大な翻訳と受容の過程を保存するものにほかならないと論じた。

続いて、近代日本における大蔵経編纂の歴史が取り上げられた。明治期の廃仏毀釈という危機を経て、増上寺三大蔵を重要な基盤として『大日本校訂大蔵経』が編纂され、さらに1924年には『大正新脩大蔵経』が刊行されたことで、東アジア仏教研究の国際的な学術基盤が整えられたと指摘した。現在進められている令和大蔵経プロジェクトは、この歴史を継承しつつ、約一億一千万文字に及ぶテキストと複数の版を統合し、世界のどこからでも自由にアクセスできる新たな研究基盤を構築しようとするものであると説明した。

また、下田は、増上寺に三大蔵が伝えられていたことが、近代以降の大蔵経編纂史を支える重要な前提であったと述べ、増上寺という場所の歴史的な重みを強調した。さらに、大蔵経の伝承を、異なる文化や言語が互いを排除するのではなく、違いを認め、照らし合いながら、共に成り立つ地点を見いだしていく営みとして位置づけた。そのうえで、仏教がたどってきた多様な歴史全体が、そうした営みのなかに収まっていくことを示し、講演を結んだ。

■ 第二講演「増上寺三大蔵経の意義」

—— Jean-Noël Robert 氏(碑文文芸アカデミー正会員/コレージュ・ド・フランス名誉教授)



第二講演では、Jean-Noël Robert 教授が、東アジア文化史と地政学の観点から三大蔵の意義を論じた。まず、大蔵経を単なる文献集成としてではなく、仏法そのもの、すなわち法身と結びつく存在として捉える視座が提示された。この視点に立てば、大蔵経を編纂し、所蔵し、流通させることは、宗教的行為であると同時に、国家や文化のあり方を示す政治的・象徴的行為でもあったと論じた。

そのうえで Robert 教授は、江戸初期、すなわち17世紀前後の東アジアおよび東南アジアを「大蔵経ネットワーク」とも呼ぶべき時代として位置づけた。漢訳大蔵経だけでなく、パーリ語、チベット語、モンゴル語、満洲語など、さまざまな言語・文字による大蔵経の編纂・翻訳が進められ、それぞれの文化圏において仏教の普遍性と地域的個性を同時に示す役割を果たしていたことが論じられた。この文脈において、家康公による三種の大蔵経の集成は、日本国内の宗教的・政治的判断にとどまらず、東アジア全体に広がっていた国家と大蔵経をめぐる観念のなかに位置するものであると論じた。

最後に、漢訳大蔵経が失われたインド原典を保存した

けでなく、仏教思想に新たな展開をもたらした「生きている」正典であることを強調した。

■ 第三講演「増上寺三大蔵のユネスコ『世界の記憶』申請の英訳事業」

—— Mark Blum 氏(カリフォルニア大学バークレー校教授)



第三講演では、Mark Blum 教授が、申請書英訳の実務と、その過程で直面した課題について語った。初回申請では、できるだけ読みやすい直訳を心がけ、歴史的事実を英語で説明するだけでなく、専門用語についても必要に応じて説明を含めた訳語を用い、脚注を付けたり原文の一部を書き直したりすることもあったという。

しかし審査側からは、漢字を読めない読者には資料の価値が伝わりにくいこと、「大蔵経」や「徳川家康」といった固有名が非専門家には自明でないこと、検索機能があっても漢字を読めない利用者には十分に機能しないことなどが指摘された。こうした経緯を踏まえ、再申請では歴史的価値の説明に加えて、デジタル公開や検索性、国際的な利用可能性を前面に出す方向へと大きく改稿された。

三度目の申請にあたって、Blum 教授はユネスコ「世界の記憶」に登録された仏教関係資料を調査し、仏教や日本史に詳しくない読者にも増上寺三大蔵の価値が伝わるよう、申請書の書き方そのものを見直す必要があると判断した。原文を一語ずつ置き換えるのではなく、内容を保ちつつ、もともと英語で書かれたように読める文章を目指して英訳を作成したことが述べられた。翻訳において重要なのは、原文を正確に目標言語へ移すことだけではなく、その言語を読む人々に共鳴する言葉を作ることであるという認識が示された。さらに、同一経典の複数漢訳が大蔵経内に保存されていること、大正蔵が増上寺三大蔵に基づき、脚注を通じて異なるテキストの語句を比較できる学術基盤を築いたこと、そして大正蔵や増上寺三大蔵の画像をインターネット上で自由に閲覧できるようになったことが挙げられ、これらの点が、ユネスコ「世界の記憶」への登録において重要な意義をもつものとして示された。

■ 対談で語られたこと

対談には、三名の登壇者に加え、永崎研宣（慶應義塾大学／人文情報学研究所主席研究員）が登壇し、三大蔵の文明的意義、翻訳と国際化、AI 時代における大蔵経編纂、デジタル化と国際標準化、さらにデジタル時代における仏典受容のあり方など、多岐にわたって議論が交わされた。

まず下田は、仏教の伝承が常に滅びの危機をくり返してきた歴史であることを指摘した。その一例として、20 世紀後半のカンボジアでポル・ポト政権下の仏教弾圧により僧侶や学者が処刑され、仏教が滅びかけたものの、經典や伝承が国境を越えてタイやミャンマーへ移され、政情の安定後に継承されたという事例を挙げた。口頭伝承から写本へ、写本から木版印刷へと媒体は変化した。經典は、その意味を十分に理解する専門家だけでなく、經典を宝と

して守ろうとした多くの人々の努力によって伝えられてきたとし、大蔵経を残し、伝える営みそのものが、仏教の歴史にほかならないという視点が提示された。

翻訳をめぐるのは、Blum 教授が、専門用語を別の言語に置き換えること以上に、説明が相手に通じるかどうかが重要であると述べ、仏教の理解は一方的に伝達されるものではなく、対話を通じて互いに学び合うものでもあることが示された。

永崎は、デジタル化と国際標準化をめぐる具体的な取り組みとして、大正新脩大蔵経に含まれる Unicode 未収録漢字の登録、悉曇文字の異体字の国際標準化、さらに返り点・割注・訓点など東アジア固有のテキスト要素を国際標準の中で扱うための働きかけを紹介した。こうした事例を通じて、専門家自身が国際標準の形成に主体的に関与しなければ、自らの文化や学術的知見が外部の枠組みによって代弁されかねないという問題が浮かび上がった。さらに、仏典の受容は必ずしも「読む」ことだけに限られないとして、大般若経の転読やチベット仏教のマニ車（経文を収めた円筒を回転させることで、読誦に相当する功德を得るとされる法具）を例に挙げ、デジタル技術を用いることで、仏典との関わり方を新たな形で展開できる可能性にも触れた。

AI については、版間異同の整理やテキストへのアクセス支援など、デジタル技術が有効に働く領域がある一方で、それを何のために用いるのかを人間の側が問い続ける必要があることが確認された。大蔵経を未来へと継承していくためには、翻訳、国際化、デジタル化、標準化を個別の技術的課題としてではなく、仏典をどのように受け取り、伝えていくかという大きな問いの中で捉える必要があることが共有された。

■ 総括の挨拶 —— 袖山榮輝氏(大本山増上寺 教務部長)

最後に、大本山増上寺の袖山榮輝教務部長より総括の挨拶があった。袖山部長は、2015 年のデジタル化着手から 2023 年 11 月の公開、さらにユネスコ「世界の記憶」への申請と登録に至るまでの歩みを振り返った。そのうえで、登録後に滋賀県の大箕山菅山寺関係者から、宋版（思溪版）大蔵経に確認される「菅山寺」の印影を見せてほしいとの連絡があったことを紹介した。

その結果、かつて菅山寺にあった大蔵経が増上寺に伝えられているという地域の伝承は、その印影によって確かな歴史として裏づけられることになった。袖山部長は、増上寺が三大蔵を大切に保管してきたからこそ、菅山寺にあったという歴史もまた証明されたと述べ、經典には目に見えない形で人々を引きつけ、導いていく力があるのではないかとの実感語った。

本シンポジウムを通じて、増上寺三大蔵の価値は、過去の文化財として保存されることにとどまらず、編纂、翻訳、デジタル化、国際標準化、AI 活用を通じて、次世代へと継承されていくべきものとして示された。増上寺三大蔵がもたらす未来とは、異なる言語・文化・時代を結び直し、仏教の知を世界に開き続ける営みである。

3 公開学術集会から——DH の最前線 ●王一凡

本研究課題では、令和大蔵経編纂に関わる様々な要素について国内外で広く議論を行い、仏教学のみならず人文学全体にも資することを目的として、仏教学及びデジタル・ヒューマニティーズに関する公開学術集会を開催してきている。また議論の場を広く公開するために、基本的にはオンライン同時配信も実施している。これらについて、以下に簡潔に報告する。

2026年5月22日（金曜）[講演]

● Workshop “Aspects of Digital Humanities in Asian Studies”

https://www.cbs.ugent.be/conference/workshop_aspects_of_digital_humanities/

ベルギーはヘント（Gent / Gand / Ghent）の中心部、ヘント大学のシンボル「本の塔」を見上げる芸術・哲学部棟にて、ヘント大学仏教学センター（GCBS）主催の DH ワークショップが開催され、本特別推進研究の研究分担者・永崎研宣と事務局の王一凡が招待講演を行った。本イベントはデジタル東アジア研究における学術交流を目的としたもので、同センターにおける多彩なプロジェクトと本研究の取り組みが相互に紹介された。

ヘント大学からは4名が発表を行った。Christoph Anderl 教授は同センターの活動、特に構築を進める DMCT（中古中国語写本データベース：<https://www.database-of-medieval-chinese-texts.be/>）の沿革、内容、共同研究体制について紹介した。Mariia Lepneva 氏は明末清初の復興仏教における師弟関係を基にネットワーク分析を行った結果、清に入ってから教勢の発展に律宗宝華山派の影響が大きいことを論じた。Laurent Van Cutsem 氏は敦煌写本の TEI 構造化文書によるテキスト比較の成果を示し、その際の構造化と異体字の課題について考察した。Chentong Liu 氏は四川省安岳県の石仏群の分析のために地理情報と AI による自動画像分類を利用する進行中の研究について報告した。

本研究からは、永崎が SAT および『令和大蔵経』編纂プロジェクトの全体像と理念、システム、作業工程、各方面の基盤整備の状況を解説した。続いて、王が博士論文のテーマである統一切経音義字形コーパスを題材として、前近代の東アジア文献の研究に符号化（文字コードによる）テキストデータを用いる限界と検索可能な画像資源を構築する重要性を論じた。

全体として、双方の参加者らの関心分野に近いこともあり、質疑応答が時間を大幅に超過するほどの活発な交流が行われるなど、今後の共同研究の可能性も強く示唆する非常に実り多い会合となった。

2026年7月18日（土曜）[共催]

● DH 国際シンポジウム「生成 AI 時代の人文学データ基盤」

<https://dhsympo2026.dhii.jp/>

「生成 AI 時代の人文学データ基盤：構築・共有・継承をめぐるインセンティブの再設計」と題し、本研究課題などが共同で企画した国際シンポジウムが東京ビッグサイトで開催された。ドイツより Christof Schöch 教授を招き、午前・午後をまたい

で基調報告、ポスター／デモ、基調講演、パネルの計4セッションを詰め込んだ密度の濃い内容であった。

はじめに、本課題の研究代表者・下田正弘が基調報告を行った。その中で、デジタル化に必要なデータの整備に対して人文学界の評価メカニズムが十分に対応しておらず、また新たな視点の提出をもって研究者の業績として認識する人文学の研究環境に生成 AI が破壊的な影響をもたらしているという現状を受け、将来にわたって人文学知識の探究と継承を維持するためには、研究コミュニティに対するあらゆる形の貢献を記録する抜本的なパラダイムシフトが必要だという提言を發した。

続くポスター／デモセッションでは、日本国内で DH を実践する26の教育・研究機関による多彩な展示が集まった。それぞれの機関が展示内容を簡単に紹介したのち、会場内の各持ち場で参加者らと議論と交流を行った。本研究課題からも令和大蔵経編纂のための AI-OCR をテーマとしたポスターを出展した。

午後は、トリリア大学デジタル・ヒューマニティーズ・センターの Christof Schöch 氏による基調講演から始まった。氏は欧州における DH とオープンサイエンスの推進の経緯および体制を紹介し、現在進行形で発達する AI 技術がオープンサイエンスに与える影響と活用の方策について実例を挙げて詳しく論じた。AI 技術はより多くの人々にデータの作成と利用の可能性を広げる点でオープンサイエンスと親和的だが、既存の商用 LLM は権利の曖昧なデータからなるブラックボックスであり、学術目的で用いることは倫理や説明可能性の点で懸念が大きい。そこで環境負荷の低い小規模特化モデルの作成や著作権に配慮した学習アルゴリズムなどの取り組みを行っているという。

講演に続き、日本国内から国立歴史民俗博物館の橋本雄太氏、慶應義塾ミュージアム・コモンズの本間友氏、九州大学の中川奈津子氏、名古屋大学の日比嘉高氏、大阪大学の吉賀夏子氏の5名のパネリストがそれぞれの取り組みと経験について発表した。市民参加、多分野協働、非技術者の参画などの文脈において DH を活用したプロジェクトの成果と課題について共有がなされた。

最後にすべての登壇者が壇上に集まり、全体討論が行われた。時間いっぱいまで精力的な議論が交わされたが、参加者の間では大手 LLM の利用につきまとう安全性、透明性の問題に興味集中した。中でも無償公開の学術的成果を企業が収集し販売する構造が、論文購読料問題（投稿された学術論文の著作権を出版社が取得して高額な購読料を課す問題）と相似するとして、学術界から意見提起をすべきとの意見も目立った。



DH の最新状況をキャッチアップするためのイベント情報は「人文学情報月報」をチェックしてください